巡検報告

面河村巡検

濱　　幸恵

7月12日午前9時45分，JR松山駅前，次々と顔を現わす三年生たちは，この三泊四日の面河村巡検に期待を抱いて皆一様に明るい面持ちであった。あれは，7月の強い陽光のせいだったのだろうか，いやあの時はまだ，指導教官熊谷先生による御指導が，遥か年が明けても続くだろうことを誰一人として予測だにしていなかったはずである。

三年生23名，院生2人，そして熊谷先生，杉谷先生，蕉先生という力強き指導教官に恵まれて，愛媛県上浮穴郡面河村にて，山村の生活・文化とその変容をテーマに巡検は始まった。この7月までの半期の間，地理調査法という授業を通して，山村についてのあらゆる問題を文献によってわずかではあるが学んできた。そしていよいよフィールドに出て，体を使って調査ができるぞ，という気持ちのため今までの巡検とは少し違っていた。

まず村に入って驚いたのは，なんと澄んでいる川の水だろうということだった。さすがは石鎚山を背後にもつ面河渓だなあ，としばし巡検調査の事は忘れて，皆で国民宿舎まで面河渓を歩いたのだった。そして，ここはもう東京とも松山とも全く異なる山村なんだ，ということも往来の少ない静かな道路からだけでも感じ取ることができた。

今回の巡検は，もちろん村役場や山岳博物館に行ってお話を伺うこともしたが，何と言っても目的とする調査活動は，個別に行う聴き取り調査である。私たち三年生にとって初めての経験であったし，全く知らない土地でいきなり大丈夫かなあ，といった不安が少なからずも皆の胸に渦まいていたことだろう。その第一関門が早くも初日の晩にやってきた。翌日行う聴き取り調査に備えて，決められた訪問先のお宅に予約確認の電話を入れるのだ。二人一組で二つの訪問先を担当することになっている。熊谷先生から訪問先の方の名前と電話番号をもらう。いよいよ村の住民と私たちの接触開始だ。緊張する。皆それぞれ相手方の反応は様々だ。スムーズに成し終えた人，早くもピンチに陥った人もいる。私は相手方の優しい対応に安心した一人であるが，一方明日の訪問が増々不安になった人も，もちろんあった。

そして聴き取り調査当日，車何台かに分乗し，各家の前で次々と降ろしてもらった。車を降りていく友達の緊張した顔，もうすぐ自分の目指す集落だ，聴き取り内容をあらかじめ頭に詰め込んでおかなければ，と私の頭も張りつめてくるのだった。

私たち二人組が訪ねたお宅では，やはり電話の声から想像した通りの優しそうな老夫婦が出迎えてくれていた。私たちを快く家の中に招き入れて下さり，聴き取りにも御夫婦二人で対応していただいた。「面河村巡検調査票」というマニュアルはあるものの，調査票通りに質問していたら，まるで警官による尋問のようであるかもしれない。例えば，所有農地面積や年収などを尋ねる項目もあるので，それは話しの進み具合，相手の応対内容によってこちらが上手く構成を考えねばならない。とは言いつつも何しろ初めての経験だから，しどろもどろ，調査票をパラパラさせながらではあった。それでも全ての質問に対して嫌な顔一つせず答えて下さって，思いの他順調に終わった。一息ついた時には，奥さんがスイカをもてなして下さり，調査以外の話も伺う時間が持てたことは，私たちにとって何よりもうれしいことだった。

その晩のミーティングでは，皆がそれぞれ聴き取り調査で得た成果を報告したのだが，その口調からは，調査票という建前を越えて貴重な経験をしたという満足感が伝わってくるようであった。

そして最終日には，この大自然を身をもって学習しよう（!?）と，心待ちにしていた石鎚山登山が行われた。さすが西日本一の高さを誇る石鎚山とあって，車で登山口まで行くと，とても夏服では耐えられるものではないのだ。熊谷先生を先頭に歩き始めたが，何しろ先生は，パプアニューギニアで鍛えた足腰の持ち主である。か弱き女子大生たちは息をきらせつつも従った。そしてやっと頂上に着き，岩に腰かけて食べた弁当の味は格別であった。

（7月12～15日　熊谷教官指導）

本巡検について「愛媛県面河村巡検報告書」135頁が作成されています。